

佐久市立近代美術館について

佐久市立近代美術館は、1977年に佐久市に寄贈された「油井一二コレクション」を契機として美術館建設の気運が高まり、多くの方々の多大なご協力のもと1983年、駒場公園の一角に開館しました。油井一二コレクションは、株式会社美術年鑑社 初代社長の故 油井一二氏が、その半生をかけて集めたコレクションで、昭和の日本画壇の特徴をたどることができます。2013年から2014年にかけて開催した当館所蔵作品による「時代」展は、このような当館の収集特徴が表れた展覧会でした。

また、近年の特別企画展では佐久に縁のある方を積極的に取り上げています。「武論尊原作展 デビューからの軌跡 武論尊／史村翔の世界」(2021年)や「脱皮する大地・浅間山 長岡國人展」(2020年)のほか、「山本文彦展」(2014年)、「桜井寛展ーモチーフと共に」(2011年)などを開催してきました。このように、佐久が育んだ美術文化の一端を丁寧に編んでいくことや、大都市の公立美術館とは照準の異なる地域型の展覧会を企画していくことは当館の重要な役割と考えています。

当館の歴史を記す印刷物の中に、1990年4月に発行された『施設の概要 佐久市立近代美術館 カルチャー館・油井一二記念館』があります。ここには1990年の増築、改装の概要が記されていて、新館を増築したときの真新しい美術館の外観や内装の写真が掲載されています。その中には、まだ収蔵品が入っていない収蔵庫の写真もあり、隙間なく作品の並んだ収蔵庫しか知らない私たちには、収蔵品の物量を実感する印象深いページです。

美術館の収蔵庫は作品保管のために湿度や温度が管理されています。また、展覧会ごとに一定数を収蔵庫から出し入れするため、作品を運搬しやすいような導線を確認しなければなりません。運搬時に作品を傷つけることのないように、絵画ラックに収まらない大きな作品は梱包した状態で保管しています。海外では収蔵庫内に観覧者が立ち入り鑑賞できる新しいコンセプトの美術館がオープンしましたが、今後の当館収蔵庫の活用方法を検討していく上で、そのような動向も興味深く見守っています。

また、作品は各種素材で作られているため、ただ保管しておくだけでも長い期間中には少しずつ劣化していきます。どの作品も50年から100年のうちに、いずれは修復が必要になると思われ、収蔵するときに修復を想定した検討も必要です。

このような中で、佐久市立近代美術館はもうじき40周年を迎えますが、今後、市の個別施設計画に基づく施設の改修事も検討しています。さらに快適で充実した空間の場の提供と、豊かな人間性を育み地域文化の発展を目指して事業を進めていきます。

(館長 日比野ルミ)



Column

学芸員の仕事

博物館法の第4条4項には、「学芸員は、博物館の資料の収集、保管、展示および調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる。」とありますが、展覧会事業や教育普及事業を企画するには、まさに、この積み上げられた研究成果が不可欠です。

当館には全5室で行う展覧会事業だけでも年間4~5本、その他に地域の皆様を対象とした公募展なども開催しています。学芸員は、資料収集から調査研究、事業実施までの全てを滞りなく行うため、日々奮闘しています。

また、学芸員は美術館の「核」となり、専門的な知識を活かして、調査研究の成果を地域の皆様にわかりやすく伝えていこうと教育普及活動にも力を入れています。



はじめまして、「いちじくん」です。

佐久市立近代美術館を応援するいちじくの妖精。好きな作品は平山郁夫《油井一二氏像》(当館蔵)。

編集後記

Saku Museum News (佐久市立近代美術館ニュース) No.1は、当館のホームページでも、ご覧いただけます。年に1度の発行なので、「美術館の1年を振り返ること」と「学芸員の関心事を広く皆様にお伝えすること」を念頭におきながら編集しました。掲載した記事について、お気づきの点や感想、そのほか佐久に縁のある作家情報などを、書面等でお寄せくださいましたら幸いです。当館の調査研究、教育普及に役立ててまいります。

佐久市立近代美術館ニュース No.1

発行日 2022年3月27日

編集・発行／佐久市立近代美術館 油井一二記念館

〒385-0011 長野県佐久市猿久保35-5(駒場公園内)

TEL 0267-67-1055 FAX 0267-67-1068

<https://www.city.saku.nagano.jp/museum/>

デザイン・印刷／双葉印刷



Saku Museum News

佐久市立近代美術館ニュース No.1 2022.3

「おぼけトンネル」の正体 田辺光彰《さく》

当美術館に隣接する芝生広場の中央には、ステンレス製のタワー(風導塔)と石張りの建造物があります(図1)。一見すると公園利用者のために設置された遊具や休憩所のようにもみありますが、その正体は野生稲などをテーマに、国内外で壮大な作品を手掛けた彫刻家、田辺光彰(1939-2015)の作品です。この作品《さく》は、1983年の当美術館の開館にあわせて制作され、今日まで約39年間、公園を訪れる人々を見守ってきました。

《さく》は、高さ40メートルの風導塔と、佐久地域で産出される溶結凝灰岩「佐久石」が使われた石廊、芝生広場の東西を貫く遊歩道から構成される作品で、風導塔の先端で上空の気流を取り込み、地下空間を経由して石廊内のドーナツ型の通気口(図2)から吹き出るように設計されています。90度に2か所が屈曲した石廊内は薄暗く、出入口のほかは赤い大理石の天窓(図3)からわずかな光が差し込むのみの空間です。鑑賞者は千曲川の流れを模したという遊歩道から石廊に入り、暗がりの中で五感を研ぎ澄ませ、廊内に絶え間なく流れてくる佐久の清冽な大気を感じ取ることができます。

神奈川県出身の田辺は、1961年に多摩美術大学彫刻科を卒業した翌年、彫刻家のイサム・ノグチ(1904-1988)と出会い、その作品から強い影響を受けます。ノグチの仕事の中でもとりわけ「広場」に視線を注いだという田辺は、1969年から初の屋外作品《山内による》を制作し、1970年代には国内各地で開かれた屋外彫刻のコンクールなどで「混在」と題した彫刻作品のシリーズを発表しました。

田辺が初めて佐久を訪れたのは、美術館建設のため佐久市に美術作品を寄贈した、同市出身の実業家である油井一二(1909-1992)の招きに応じてのことでした。油井は、1978年から建設が始まった駒場公園に自身が寄贈した彫刻作品を設置するにあたり、それらの配置と台座のデザインを田辺に一任しました。その過程で《さく》を構想した田辺は、油井の出資により、大掛かりな屋外作品を制作するという念願を果たしたのです。

現在《さく》は、駒場公園へ遊びに来る子どもたちから「おぼけトンネル」と呼ばれているようです。作品が遠巻きに鑑賞されるだけにとどまらず、人々が暮らす環境におのずと馴染んでいったことは、長らく「広場」の意味を考えて彫刻制作を実践してきた田辺の思惑とおりの結果ではないでしょうか。とはいえ、今はスリル満点の「おぼけトンネル」で悲鳴を上げるばかりの子どもたちにも、いつかはこの作品の本当の制作意図を伝えたいものです。(学芸員 伊能あずさ)



図1 田辺光彰《さく》 佐久市立近代美術館蔵



図2 石廊内の通気口



図3 大理石の天窓

1 構造設計は宮本忠長建築設計事務所が手掛けた。「石廊」の呼称は「洞窟」「回廊」など文献によって異なるが、本稿では同事務所による設計図内で用いられている「石廊」を採用した。
2 野村太郎「田辺光彰」八坂書房、2011年、p.6。
3 柳生不二雄「彫刻のあるまちづくり 長野・佐久 自然との対話から一層外彫刻賞と田辺光彰の「さく」「三彩」432号、1983年、p.101。

Column

《さく》に集う皆さんのこと

毎日、開館前に《さく》の内部や周辺を当館の職員が清掃しています。これは1983年の開館以来、38年間続けていることで、ほかに5年に一度のメンテナンスも行っています。このように大切に守られてきた《さく》は、当館にとって特別な作品の一つで美術館のロゴデザインにも使われています。

また、当館は駒場公園の一角にありますが、《さく》の周りは芝生が植えられベンチも設置されています。このため、散歩者も多く、ベンチでお弁当を食べたり、石廊(作品の一部となる石とコンクリートでできた回廊)の外壁にボールを当ててサッカーの練習をする人もまれに見かけます。サッカーの練習はご遠慮願いたいものですが、多様ではあれ、たくさんの方に利用していただくことは、当館にとっても大変うれしいことです。また、付近の園児からは「おぼけトンネル」とも呼ばれ親しまれていますが、愛称があるなんて素敵なことだと感じています。

「トンネル」のようでもあり、「縁側」「あずまや」の機能も備える、この作品には、ときどき小さな生き物がやってきて痕跡を残していくことがあります。昨年の春には、石廊の入り口内側の真上にツバメが巣を作り始めました。ツバメは、安心して子育てができる場所だと考えたのでしょうか。ほかにたくさんの鳥、犬や猫などの小動物の足跡を見かけることもあります。作品《さく》は私たち人間だけでなく、周辺に生息する動物たちにとっても憩いの場なのかもしれません。

「いろ」と「かたち」で遊んでみよう！

開催日：2021年5月22日㊤、23日㊤

さまざまな絵画材料と、色や形による抽象的な表現に親しんでもらうためのワークショップを開催しました。

参加者の皆様は、当館で用意した支持体の上に、大きさの異なる「まる」「さんかく」「しかく」の型紙を使って鉛筆で自由に線を描き、それを手掛かりにクレヨンやアクリル絵具、水彩色鉛筆などで色をつけて、1枚の平面作品を完成させます。また、両日も午前部を「小中学生と保護者向け」、午後部を「高校生以上向け」として、午後部では絵の具の成り立ちを簡単にレクチャーした上で、日本画の技法と卵テンペラにも挑戦していただきました。



「武論尊 一問一答！」「同級生対談 武論尊×榎山徹（佐久商工会議所）」

開催日：2021年9月21日㊤

「武論尊原作展 デビューからの軌跡 武論尊／史村翔の世界」の関連イベントとして、武論尊氏本人を招いて2本のトークショーを開催しました。

「武論尊 一問一答！」では、会場とインターネット上で事前に武論尊氏への質問を募集し、FM さくだいらアナウンサーの中村哲郎氏との対談形式で回答していただきました。武論尊氏の鋭い切り返しが笑いを誘う一方、ストーリー制作の根幹に迫る場面もありました。イベントの途中では、「サンクチュアリ」「BEGIN」などの作画を手掛けた池上遼一氏が観客席からサプライズで登壇し、会場を盛り上げました。また「武論尊一問一答！」の様子は、FM さくだいらからサイマルラジオを通じて全国に生放送されました。

「同級生対談 武論尊×榎山徹」では、武論尊氏の中学校時代の同級生である榎山徹氏（佐久商工会議所会頭）が登壇し、学生時代の思い出や、これまでに実施してきた佐久市とのコラボレーション事業を振り返りました。



長岡國人アーティストトーク「大地の黙示録」

開催日：2021年11月7日㊤

佐久市出身の美術家である長岡國人氏（写真壇上右）による講演会を開催しました。本来は2021年1月の特別企画展「脱皮する大地・浅間山 長岡國人展」の会期中に予定されていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑みて、上記の日程に延期されました。

長岡氏は1966年に東西対立の最前線であった西ベルリンへ移住し、緊迫する情勢下で銅版画制作に打ち込みました。講演の前半では当時置かれていた状況や心境を、グラフィティの描きこまれたベルリンの壁など、長岡氏が撮影した貴重な写真を交えてお話しいただきました。その後は今日まで約50年間で制作してきた作品について、着想源となった事物にも触れながら紹介していただきました。講演終了後は、参加者との活発な質疑応答が行われました。



第36回佐久平の美術展

開催日：2022年1月8日㊤ ▶ 1月30日㊤

「佐久平の美術展」は、佐久地域に関心がある皆様から、美術作品を広く公募して開催しています。美術作品の制作をされている人々の発表の場をつくり、佐久の皆様が親しんでいただける展覧会を目指しています。この公募展の特徴は何と言っても、審査員の先生方による個別のコメント・アドバイスが全ての応募者に伝えられる点です。美術館では審査員のコメントを書き起こして、出品者の皆様に、お届けしています。

審査員 遠藤彰子氏（審査員長、画家）、船水徳雄氏（日本画家）、竹内順一氏（美術評論家）

佐久市児童生徒美術展 日向裕・綾 美術コンクール

開催日：2022年2月11日㊤・㊤ ▶ 2月27日㊤

「児童生徒美術展 日向裕・綾美術コンクール」の開催は、故日向綾氏の妹の藤間とみ氏から佐久市が受けた寄付金を基金として活用しています。今年度からは、より多くの子どもたちが美術に親しみながら、制作活動を通じて自己表現できる機会の場の拡大を目的に、学校を介さずに直接応募できる「個人応募部門」を設けました。

今年度も多くの応募作品の中から、審査基準となる「独創性のある作品」、「現代を生きる子どもたちが意欲的に制作した作品」、「技術の優れた作品」に該当する作品が入選し、佐久市の児童・生徒の創作力の水準の高さが感じられる展覧会となりました。

審査員 猪瀬昌延氏（信州大学教育学部 准教授）、田嶋健氏（木版画家）、日比野ルミ（佐久市立近代美術館館長）



コレクション紹介

佐藤千曲《軽井沢風景》とスケッチブック



図1 佐藤千曲《軽井沢風景》絵本彩色 124.0cm×184.5cm

初夏を思わせる色鮮やかな樹木の中に、赤や緑の屋根の家々がリズムカルに配置されています。《軽井沢風景》というタイトルから軽井沢の別荘地を描いた作品であることが分かりますが、家屋の色や形はどれも似通っており、取材地を知る手がかりになる特徴的な建物は見当たりません。

制作者である佐藤千曲（1911-1975）は、1911年に北佐久郡岩村田町（現佐久市岩村田）の茂木家で生まれました。日本画家の児玉希望（1898-1971）に師事し、1946年の初入選以来、日展での入選を重ねました。「佐藤」は結婚して佐藤家の養子に入った後の姓で、「千曲」は師である希望から出身地にちなんで命名された号です。日展以外には1945年に始まった全信州美術展覧会（1948年より長野県美術展）や、1950年に児玉希望と伊東深水（1898-1972）により結成された日月社展で作品を発表しました。

本作《軽井沢風景》の正確な制作年や展示歴は不明ですが、2017年に当館に寄贈された千曲のデッサン及びスケッチ群の中に、本作の制作過程を知ることのできる資料があります。

その資料は、「緑ニツ、マレタ ハイカラノ軽井沢」「右下の森の中へ一家シツカリカ、ズ一寸カベ、屋根を見せる」など、本作の特徴が記されたスケッチブックの紙片（図2）で、児玉希望門下の日本画家の姓が記されていることから、研究会のような場で《軽井沢風景》の小有名の講評を受けた際に、千曲自身がその内容を書きとめたものと推測されます。この紙片には、「ハツタリガキテナイ」「アンタノ画ニハパンチガナイ」「タッチヲ出セ、激しさを出セ」といった、門下の先輩画家たちからの厳しい意見が鉛筆で細かく書き込まれています。

一方、赤いコンテで書かれた箇所には「ボナル ヲ参考 梅原龍三郎 自分デナイ画ヲ作ル」と、本作を完成させるにあたって意識したとみられる画家の名前も登場します。これは先輩画家たちが投げかけた言葉の一部であるのか、あるいは千曲自身の意思であるのか判然としませんが、本作に似た風景が描かれたエスキース（図3）と比較すると、本画にあたる《軽井沢風景》はまさしく梅原龍三郎の代表的な作品《紫禁城》（1940年）に倣ったかのような、高い位置から家屋を俯瞰する構図に変更されています。

また、同時期のものと思われる別の紙片（図4）には、1954年の日展入選作《佐久風景》を振り返る記述が確認できることから、本作はその翌年から1961年の日展入選作《崖》で作風が大きく変わるまでの間に、公募展に落選した作品、もしくは出品を断念した作品であったと推測できます。

爽やかな別荘地の風景に、画家の切実な向上心が秘められた作品です。

（学芸員 伊能あずさ）

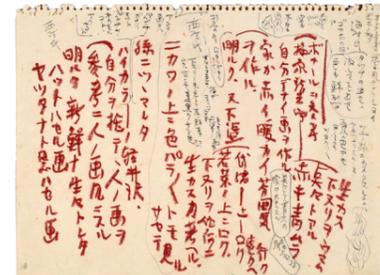


図2 先輩画家からの意見を書きとめた紙片

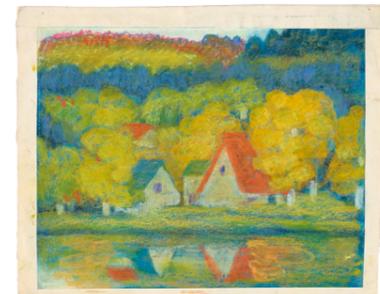


図3 エスキース

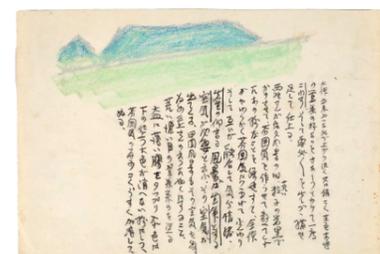


図4 《佐久風景》に言及した紙片

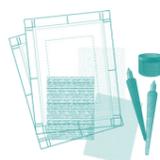
Column

著作権について

著作権法（以下「法」という。）では、著作物の定義を「思想又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するものをいう。」と定めています。具体的には、絵画や版画、彫刻、建築物、地図、映画、写真、プログラムなどを指すほか、漫画や書、舞台装置なども含まれます。

著作物は、自由に複製したり使用したりすることはできず、使用する場合は、その都度、著作権者の許諾を受け、必要に応じて使用料を支払うなど、その取扱い方法は、法により細かく定められています。

コラージュ作品やポスター等の制作の際には、他人の撮影した写真を使用しないことや、アニメや漫画のキャラクターを勝手に使用しないなど、著作権侵害にならないよう注意することが必要です。



月替わりコレクション紹介

佐久市立近代美術館の収蔵作品（解説つき）を一ヶ月限定で紹介しています。佐久市立近代美術館のホームページをご覧ください。
<https://www.city.saku.nagano.jp/museum/event/webexhibition.html>

